

## “political”について思うこと

澤 由紀子(立命館大学教職研究科准教授)

今回もテレビドラマからの引用をしましょう。今年1月から3月まで放送された「御上先生」というドラマです。「御上先生」は、文科省から高校に派遣された官僚が令和の18歳と共に日本教育に蔓延る腐った権力へ立ち向かう(TBS ホームページ)というストーリーでした。いつもの学園ドラマと違ったのは、主人公が教師として派遣されたエリート官僚、派遣先は多くが難関大学に進学する超エリート校だったところです。そこで主人公が亡くなった兄から聞いた言葉として personal is political が紹介されます。「個人的なことは政治的なことである。」と日本語に訳され、ドラマの中でも、「個人が抱える生きづらさ、個人でなんとかしろってなりがちだけど、じつは社会的な問題。つまり政治が解決すべき問題だって意味なんだよね。」という主人公のセリフで説明されています。

私が personal is political という言葉に出会ったのは、2016年頃アメリカ大統領選挙の際に、political correctness という言葉が報道された頃だったと思います。日本でも「ポリコレ」と省略され世間を賑わしていました。その頃以前からたとえば、職業名として特定の性別のみが従事すると誤解される言葉や人種の違いによる偏見や差別が助長されるような呼び方が変更されつつありました。例えば「看護婦」は「看護師」に、「保母」は「保育士」、また「肌色」は「パールオレンジ」や「ベージュ」などといった変更です。さて、この political correctness は「政治的正しさ」「政治的正当性」と訳されますが、当時私はその「政治的」という意味がよくわからず違和感のようなものを抱いていました。学校は、教育基本法第14条2項で定められるように政治的中立性を保たなければならず、中でも教育公務員は教育公務員特例法により国家公務員と同等に政治的行為が制限されている、というイメージが大きかったからです。調べるとその「政治」という言葉には一般に思い描く狭義の意味だけでなく、広義の意味がいくつかあることに改めて気づかされました。一つは「ある社会の対立や利害を調

整して社会全体を統合するとともに、社会の意思決定を行い、これを実現する作用(大辞泉)」であり、political correctness の political にはこの意味もあるのではないかと思います。また、「あらゆる対人関係で起こる目標の選択、目標達成方法の決定、そしてそれらの実施あるいは実行の全過程」を指し、「例として、学校の生徒会やサークルなどでの意思決定も、広い意味での「政治」ということができる(NHK 高校講座「公共」より)」と考えると、personal is political の political はこのことも当てはまるのではないかと思います。もともとこの言葉は1960年代以降のアメリカにおける学生運動および第二波フェミニズム運動におけるスローガンとされ、一見個人の問題に見えることが、実は社会全体の構造的な問題であるという考え方を表す「政治的な」ものでした。

私は学校現場で生徒の問題に対応しつつも、それは生徒個人の問題ではなく、生徒が社会の問題を背負わされているように見え、その時出会った personal is political はまさにそのことを言い得ているのだと納得した覚えがあります。学校で働く教員にとってもそれは同様です。育児休暇は権利として行使することが奨励されているものの、いざ取得しようとする代わりの講師を見つけることが大変難しい。年次有給休暇は権利としてあるものの、膨大な日々の業務を遂行している中で、病気で倒れない限りは取得することが難しい。こうなるとこれは能力や要領の善し悪しという個人的な問題というよりも political な問題ではないでしょうか。学校などの職場や社会の問題について常に political な視点を持ち続けることが重要ではないかと思うのです。(もし「政治的」という言葉が使いつらい場合、political を使ってはいかがでしょうか。)

ドラマの中では生徒たちが、御上先生の「考えて」という言葉に促され、文化祭の展示について自分達で出した「答え」を披露することになります。